

10 感染症発生動向調査における MRSA の臨床細菌学的検査

金子 陽子・高橋 清子・安藤 昭子

阿部多実子・岩島 明*

長岡中央総合病院検査科

同 呼吸器センター内科*

長岡中央総合病院は五類感染症の定点病院である。検査科細菌室はペニシリン耐性肺炎球菌感染症、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症、薬剤耐性肺炎球菌感染症の届出を担当している。2005年1年間のMRSA感染症の現状について調査した。MRSA感染症発生数は89人であった。入院患者における発症率は0.66%、MRSA定着菌比率は75.6%、血液培養におけるMRSA菌血症の比率は3.8%、ブドウ球菌におけるMRSAの割合は40%であった。疾患名は外来では膿か症が9例で、尿路感染症は2例あった。入院では肺炎が36例と多く、腸炎17例、敗血症は6例、創部感染2例であった。気道への菌の定着を減少させることや、IVHの刺入時の滅菌操作に注意することがMRSA感染症の減少に結びつくものと思われる。

11 新生児および乳幼児におけるテイコプラニン体内動態の評価

福本 恭子・上野 和行

新潟薬科大学薬学部

新生児・乳幼児におけるテイコプラニン（以下TEIC）の体内動態を検討するため、MRSA感染によりTEICを投与しTDMを実施した生後2年以内の心臓手術後患児である新生児・乳幼児24例、および循環器疾患で入院中の成人32例を対象にTEICの血中濃度を測定した。

TEIC投与量の増加に伴い、血中トラフ濃度は上昇することが認められた。TEICトラフ濃度を体重あたり投与量で除した値（C/D）に与える影響を検討した結果、新生児・乳幼児あるいは成人ともに腎機能はC/Dに有意に影響することが認められた。トラフ濃度を $10\mu\text{g/mL}$ に維持するための平均TEIC維持投与量は、心臓手術後で腎機能が正常な新生児・乳幼児では添付文書記載量の

約半量であった。

TEICは腎排泄型薬物であるため、新生児・乳幼児においても腎機能に応じた投与量設定が必要であり、特に心臓手術後では、より慎重な投与設計が求められることが示唆された。

12 グラム陰性桿菌とMRSAの混合感染におけるABK選択の可能性

田邊 嘉也・竹山 綾・清水 崇

鈴木 信明・手塚 貴文・太田 求磨

塚田 弘樹・下条 文武

新潟大学大学院医歯学総合研究科

臨床感染制御学分野（第二内科）

呼吸器感染症においてMRSAは単独で肺炎の起因菌となることは少なく*P. aeruginosa*をはじめとするグラム陰性桿菌の混合感染であることが多い。

ABKはアミノグリコシド系の抗菌薬でMRSA以外にも広く抗菌力を有しており、MRSAと*P. aeruginosa*との混合感染においてその併用効果が期待される。

今回新潟大学医歯学総合病院における喀痰から分離された緑膿菌（2005年1月～12月）24症例、緑膿菌30株についてABKのMIC分布と同時分離菌の内容特にMRSAの検出状況を解析した。MRSAが同時に分離された例が8例（33%）で見られた。今回の緑膿菌についてABKは良好なMIC分布を示した。また、その他のグラム陰性菌にも抗菌力を有しており、症例によっては積極的に併用を試みる価値があると考えられた。

一方で緑膿菌とMRSAとの相互作用について、抗MRSA薬の抗菌力に変化を与える可能性（*in vitro*の混合培養系）が報告されており注意が必要である。